平成２３年度 学内研究助成金 研究報告書

近畿大学
課題番号：KD09

研　究　種　目	□奨励研究助成金	□研究成果刊行助成金
	■21 世紀研究開発奨励金 （共同研究助成金）	□21 世紀教育開発奨励金 （教育推進研究助成金）
研 究 課 題 名	新しい医療環境－Hospital amenity の研究開発	
研究者所属・氏名	研究代表者：文芸学部芸術学科教授　井面信行 共同研究者：文芸学部芸術学科准教授　岡本清文、准教授　安（あん）　起瑩（きおん）、 教授　本村元造、准教授　盛　加代子、文学科教授　佐藤秀明、 医学部准教授　三井良之	

１．研究目的･内容

総合大学ならではの利点を活かして、医学部と文芸学部が連携し、「新しい医療環境」とは一体どういうものかを具体性のあるプログラムとして共同開発する。
“医療の場における芸術の可能性”という視点から共同研究を行ない、**Hospital amenity** をキーワードに、”良好な医療環境”を追求する。
同時にアート側から見ても、専門領域に閉塞しがちな状況を打破し、芸術が社会に与える影響力を追求することで、人間にとっての必然性を検証する絶好の機会となり、両学部にとって双方向性のある共同研究となる。

２．研究経過及び成果

環境を、**空間・時間・人**という３つの要素に分け、それぞれのカテゴリー別に具体的なプログラムを3 カ年計画で設定してきた。その最終年として、従来の経験値を生かし、プログラムに少しずつ改善を施しながらプロジェクトベースで実施を行った。
以下は、今期に実施、施行、検討した項目のおもなものである。
最終年は、文芸学部全体イベントである『文芸フェスタ』との連動を考え、今年のテーマ「旅」をホスピタルアートに取り入れた。活動の幅を芸術学科レベルのから文芸学部レベルへと広げた。

Ａ．空間

１．ホスピタルアート１（院内展覧会）
「旅の写真展」－今研究メンバーである芸術学科教岡本准教授による写真展。鮮やかな色彩を意識したカラー写真２０点、＋伊藤教授によるヨーロッパの写真パネルを展示。写真は始めての展示であったが、絵画に比べると親しみやすく、遠い世界への思いや想像が、閉ざされた入院生活からの精神的開放につながったように思える。

２．ホスピタルアート２（院内展覧会）
「旅のテーマによる版画小品展」－版画ゼミ２回生の課題作品２０展を展示。作品だけではなく作家とのふれあいがあれば、という病院側からの声を反映するべく、作品キャプションに顔写真と作品制作への思いを記載した。このような些細な情報が、患者には重要であることがわかった。アンケートに、何点かの作品の解説を読んで、作っている人の気持ちや存在を感じたというコメントがあった。また作家と直接話したいという方もおられ、事務局を通じてメールで学生とやりとりが行われた。このように、作品を通じて人と人が繋がった事実は、作品展示が【空間】要素を超えて、【人】の関係性に影響することの証明である。こういう力が、医療施設におけるアートの役割の１つである。
更に、今展覧会では鑑賞にとどまらず、気に入った作品を鑑賞者に購入してもらう試みを

したところ、２点が売れた。もちろん利潤目的ではなく、原価的な低価格も影響したであろうが、学生にとって作品を購入してもらうという意味は、今後の制作上大きな自信に繋がる。一方の購入者にとっても、病院という受動的な場で偶然に出会った「情報」＝アートが、一過性の視覚情報にとどまらず、自身の日常生活の中に組入れる（多分に触覚的情報として）契機となったことは、医療環境が従来の機能を超えて、新たな社会施設として概念拡張できる可能性に他ならない。当研究にとって、この事実は大きい。

３．ホスピタルアート３（院内展覧会）
造形芸術の４回生作品を中心に、ロビー、通路、待合コーナーなどのスペースに展示。すでに恒例化しつつ安定的な企画である。

４．手術室までのアプローチ空間の改善
昨年の院内サービス向上・業務改善委員会で病院側から提案された、手術室周辺空間の見直しを受け、手術室までの通路及び前室を取り上げ、空間環境を考える。空間デザインゼミ生がワークショップ形式で院内施設見学や医療環境理解のレクチャーを受け、ストレッチャー体験なども踏まえて、環境デザインを考えるプロジェクトを立ち上げた。しかし時間と資金面の条件から、スタディ半ばで中断する結果となった。

B．時間

１．ベッドサイドユニバーシティ第３回目
７月に研究メンバーである日文の佐藤教授による「短編小説を読む」－三島由紀夫という演題で入院患者を中心とした院内講座を開いた。　舞台芸術の盛准教授による朗読と、学生制作の映像、佐藤教授による解説というコラボレーションは新しい文学鑑賞のスタイル確立としての可能性も感じた。
多くの院内関係者や患者に楽しんでいただいたが、中には近隣地区からの参加者もおられ、病院が地域コミュニケーションのキーステーションともなりえることがわかった。
途中で通信機器の不具合が生じたのは残念であった。臨時的設備の限界であろうが、更に技術的改善が望まれる。

２．舞台芸術専攻ドラマ・コミュニケーションの学生による演劇公演第二回目
（東日本大震災のテーマを取り上げた）２階のメイン待合ホールを特設会場とし、入院患者や家族を観客として舞台劇を行なった。アンケート調査等の結果から、入院患者のみならず、その家族も一緒に参加し、外出できない家族を持った人たちが、病院内ではあるが、リクレーションや楽しい時間を過ごしてもらえることで、患者の周辺を取り巻く生活支援にもつながる事を認識した。それだけに演劇のテーマは一般の外部公演とは異なり、より慎重に選ぶ必要を感じた。

C．人

１．　上記演劇公演において、学生達演者自身が、演じる環境を理解する目的で事前ワークショップを行なった。医学部三井准教授による基調講座や検査技師、薬剤師、医事課等様々な分野の業務を説明し、院内ツアーの後フリーディスカッションを行なった。
同時にストレッチャー体験など、空間デザインを学ぶ学生にとって貴重な経験を得ることで、総合大学ならではの多様性教育の一端が実現できた

３．本研究と関連した今後の研究計画

学部間連携の共同研究として、文芸学部―医学部という当大学の両極を成す文系学部と理系学部のプロジェクトとなった。つまりは人文科学と自然科学の融合への視座と試みである。
３年の期間にわたり、毎回試行錯誤の連続であったが、着実な成果が得られたと実感している。
この試みは、研究面のみならず、総合大学における教育的基盤再確認の作業にも関連する。
院内展示や全国初であろうベッドサイドユニバーシティ構想は、近畿大学発で全国の医療機関にも発信したい。
次のステップとしては、開発したプログラムをパッケージ化し、ソフトビジネストして成立させる仕組み作りである。基本的に医療環境整備は、恒常的かつ継続的に行われねばならず、期限付き助成金や研究資金による実験試行段階を経て、自立したキャッシュフローシステムとして確立させる必要がある。今後はそのシステムデザインの研究開発がテーマとなる。

４．成果の発表等

発　表　機　関　名	種類（著書・雑誌・口頭）	発表年月日(予定を含む)
日本建築学会	学会および会報誌	2013 年度
医療教育学会	発表	2013 年度